



2006年度倫理創成研究会諸報告

樋口, 大祐
羽地, 亮
油井, 清光

(Citation)

倫理創成講座ニューズレター, 5:56-57

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001733>



2006 年度倫理創成研究会 諸報告

第 8 回倫理創成研究会

2006 年 2 月 20 日 (月) 午後 3 時～5 時

場所：神戸大学六甲台キャンパス 文化学棟 大会議室

主催：平成 17 年度若手教員研究支援経費

「開かれた広域共同体の倫理システム創成」

共催：神戸大学大学院 文化学研究科 倫理創成論講座

報告：講演会

『安易な多文化共生とマイノリティの自立（自律）』

報告 文学部助教授 樋口大祐

2006 年 2 月 20 日、30 歳代の若手研究者グループによる共同研究『開かれた広域共同体の倫理システム創成』の一環として、上記の表題による講演会が開かれた。講演者は神戸市長田区に拠点を置く NPO 神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事長、金宣吉氏 (1963 年生まれ) である。

金氏は 1995 年の阪神大震災以後、この活動を始めており、現在は在日韓国朝鮮人の高齢者の方々に対するデイ・サービスと、ベトナムや中国等のニューカマーの子供たちに対する日本語学習支援が活動の柱である。今回は神戸市で生まれ育った金氏がこのような活動を始めるにいたる経緯とモチーフについて、

- ①「自分に影響していると思うこと」
 - ②「ボランティアから差別との闘いに」
 - ③「「共生社会」について考えること」
- の 3 点を中心に話していただいた。

印象的で刺激的な話が多かったが、特にインパクトがあったのは、①では、金氏の神戸における少年時代が、日本の高度経済成長の中で在日社会がそれから取り残され、大人たちが生きがいのある仕事につけなかった時代 (国民健康保険に加入できないため、家族の病気が全財産の喪失に直結しかねないような、資本主義の残酷さを肌身に感じる日々) であったということ。そのなかでアメリカの公民権運動を扱った映画・文学を自身の問題と重ね合わせ、そこにロマンティズムを感じていたという趣旨の発言であった。また、②では、日本の人権運動の「当事者空洞化」の状況から、在日韓国朝鮮人自身の主体性の大切さを痛感したということ、③ではそれと関連して、「多文化共生」予算に群がるマジョリティ中心の NGO や研究者に疑問を待たざるを得ない、マイノリティの欲望やマジョリティの嗜好に揺れない拠点を「共生」に必要な「社会資源」として一構築していきたい、という趣旨の発言が印象に残った。

②③に関連する論点としては、講演後の質問に対する応

答の中でも、日本人は「日本人」と「外国人」を分けている仕組みについて無自覚な人が多く、この社会ではマイノリティはまだ「見えない存在」のままである。「日本人」の作られ方の検証が不可欠だが、小熊英二氏らによる研究も社会全体の中ではまだまだマイナーな声にとどまっているという趣旨の指摘があった。また、現在進行中のニューカマーの子供に対する学習支援事業に関連しては、実態として学校の現場の先生方は子供たちの状況がわかっていないと思うが、KFC には退職した先生方で力量ある人々に多くかかわっていただいております、そういう動きをサポートするのが行政の役割であろうという発言があった。

最後に、「共生のための社会資源」を構築していく上で、「大学」との関係はどのようなものが望ましいか、という質問に対し、外国人の子供の教育環境実態の調査が実現するよう行政に働きかけているが、暗礁に乗り上げている。しかし、NPO では越えられない「公の壁」を大学が入ることで越えられるかもしれない。その方面で協力体制を組むことができれば、ぜひお願いしたい、という応答をいただいた。

講演終了後、個人的に強く思ったのは次の 3 点である。まず、少年時代の金氏がアメリカの公民権運動を扱った映画・文学に、自らを取り巻く状況に対する希望を読み込んだという点。論証抜きで断定することが許されるなら、やはりこれは芸術・文学の根源的な存在意義に触れる発言だと思う。逆に言うと、そのような文学・芸術の根源的な存在意義を発信できるかどうかということが、大学における文学教育の今後のあり方の試金石になっていくだろう。

第 2 は、②の論点に関連して、金氏が「外国人につらくあたる機関・組織というのは、自分の隣に外国人が座ることが絶対ありえないような制度になっている組織が多い」という発言に関連する問題である。この言葉には千鈞の重みと否定しがたいリアリティがあり、今後も真実であり続けることと思うが、金氏はそのような組織の例として「役人」や「学校教師」を挙げておられた。文学部、特に筆者が所属する学問分野においては、卒業生の就職先として、公務員と中高の今日委員の比率が高い比率を占めている。その意味で、この社会で「外国人差別」の再生産・拡大を今後防げるか否かということは、まさに人文系研究者・教育者のスタンス (その組織構成のあり方も含めた) に直結する問題だと思う。

第 3 は、(第 2 とも関わるが) やはり「多文化共生予算に群がる研究者」という批判に該当してしまうような、研究という行為の本質に関わる問題である。研究者と NPO では社会に対する働きかけのスタンスが異なるの

はある意味で当然であろうが、切って血の出る状況を対象としている以上は、その研究が人々の実存と単独性を損なっていないかどうか、絶えず自己検証する必要がある。しかし他方、研究一言説化という行為の中には、単独性を一般性に回収し、生きた人間を「素材」に還元してしまう危険が絶えず含まれている。金氏の指摘は改めてそのことの重要性（研究者と対象となる人々の非対称性）に注意を促したという点で、忘れてはならない言葉だと思う。

なお、最後に提起されていた、外国人の子供の教育環境調査に関する協力の呼びかけは、個人的には検討に値する問題だと考える。この点に関しては、詳述はできないが、現在、神戸大学の他の学部等でも幾つかの動きがあるようである。それらの今後の展開等も見守りながら、これからの金氏のような方々との交流を継続していきたいと思う。

この講演会は筆者が企画したが、当方の準備・広報不足にもかかわらず、当日は倫理創成講座の専任・兼任の教員各位をはじめ、多くの教員・大学院生に参加いただいた。記して感謝申し上げます。

— 終 —

第9回倫理創成研究会

2006年3月8日（水） 午後3時30分～5時30分

場所：神戸大学六甲台キャンパス 文化学棟 大会議室

主催：平成17年度若手教員研究支援経費

「開かれた広域共同体の倫理システム創成」

共催：神戸大学大学院 文化学研究科 倫理創成論講座

講演：ポストコロニアリズムと比較文学の可能性—

—タイプ・サーレフ『北へ還りゆく時』をめぐって

講師：本橋哲也（東京都立大学人文学部助教授（当時））

アフリカ諸国のポストコロニアリズムを題材にして比較文学の新しい可能性を探る。エドワード・サイードやガヤトリ・スピヴァクに依拠しつつ、タイプ・サーレフをはじめとする幾人かのポストコロニアリズム文学の作品や映画、音楽を、支配と被支配の単なる二項対立の視点で読むのではなく、伝統的な境界を横断しながら対位的に読みとく。

報告 文化学研究科助教授 羽地 亮

扱われた作品

- ・タイプ・サーレフ『北へ還りゆく時』
- ・フランツ・ファノン『革命の社会学』
- ・モハッシェタ・デビ『ドラウパディー』
- ・ガッサーン・カナファーニ『太陽の男たち』
- ・ジッロ・ポンテコルヴォ『アルジェの戦い』
- ・IMAGINE Noa & Khaled

第11回倫理創成研究会

2006年6月7日（水） 15:00～

会場：文化学研究科大会議室

講演タイトル：「宗教の合理的選択理論と「パッション」や「ダヴィンチ・コード」にみるポピュラー宗教—宗教的成員性からの脱出、声そして忠誠」（'Rational Choice Theory and Popular Religion in the Passion of the Christ and the Da Vinci Code : exit, voice and loyalty in religious membership'）

講師：ブライアン・ターナー教授（シンガポール国立大学・社会学およびアジア研究所クラスター長）

報告 文学部教授 油井清光

シンガポール国立大学教授ブライアン・ターナー氏による基調講演と、3つのディスカッション・ペーパーによる研究会。

・ディスカッション1：Hon-Fai, Chen「合理性と宗教性：国家儒教の衰退への反応としての学会」"Rationality and Religiosity: Study Societies as Responses to Decline in State Confucianism"

・ディスカッション2：阪野祐介（神戸大学大学院文化学研究科）「京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会」

・ディスカッション3：速水奈名子（神戸大学大学院文化学研究科）「B・ターナーの宗教社会学と日本」